

2021年度日本農業史学会・学会賞候補業績募集および2022年研究報告会(募集)のお知らせ

会員各位

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。日本農業史学会より標記の件について、以下の通りお知らせします。

(I) 2021年度日本農業史学会賞(学会賞・奨励賞)候補業績の募集

以下の通り、2021年度日本農業史学会賞(学会賞・奨励賞)候補業績を募集いたします。

[学会賞] (1) 対象者：優れた研究業績を公刊した40歳以下の会員(研究業績刊行時点)
(2) 対象業績：過去2年間(2020年1月～2021年12月)に公刊された著書およびそれに準ずるもの

[奨励賞] (1) 対象者：将来の発展が期待される研究業績を公刊した40歳以下の会員(研究業績刊行時点)
(2) 対象論文：過去2年間(2020年1月～2021年12月)に公刊された論文およびそれに準ずるもの。

[応募方法]:本会会員の推薦によります(著者自ら推薦することを妨げない)。推薦に当たっては、所定の推薦書を付してください。一度対象となった業績の再応募は認められませんが、同一人物でも別の業績であれば差し支えありません。

推薦書および対象となる業績(著書の場合1部、論文の場合5部(コピーでも可))を事務局までご送付下さい。締切りは、**2022年1月31日**といたします。

「推薦書書式」は、学会HP(学会規約→日本農業史学会賞表彰規程細則→「別添書式(学会賞推薦書)」または「別添書式(奨励賞推薦書)」)からダウンロードしてください。

<http://agrarian-history.sakura.ne.jp/institution.html>

学会賞推薦書：<http://agrarian-history.sakura.ne.jp/doc/suisenshosiki1.doc>

奨励賞推薦書：<http://agrarian-history.sakura.ne.jp/doc/suisenshosiki2.doc>

なお、学会賞と奨励賞はそれぞれ別の書式を使用することになります。ご注意ください。

(II) 2022年日本農業史学会研究報告会に関するお知らせ

先にお知らせしましたように2022年の日本農業史学会大会は、**オンライン方式**で行います。昨年とは異なりハイブリッド方式ではありませんのでご注意ください。

記

日時：**2022年3月28日(月)**

午前：個別報告、午後：大会シンポジウム

(*日本農経学会大会(オンライン大会)の翌日になります)

開催形式：**オンライン**

①個別報告の募集について

個別報告をご希望の方は、下記要領にて電子メール(ないし郵便)で学会事務局までお申し込みください。

1) 必要書類：申込用紙（氏名、所属、報告タイトル、連絡先、メールアドレス）

および**報告要旨（1,000字以内）**。書式は任意です。

2) 申込期間：2021年12月27日（月）～**2022年1月31日（月）**。

3) 申込先：学会事務局まで。

メールの場合：office@agrarian-history.sakura.ne.jp

郵送の場合：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学農学研究科生物資源経済学専攻比較農史学分野気付

日本農業史学会事務局まで

なお、報告時間は最長で50分（報告40分、質疑応答10分）を予定しています。（ただし報告者数が多い場合には短縮されることがあります。あらかじめご了承ください）。

会員各位の積極的な応募を期待しております。大会プログラムは2月上旬にメールにて改めてご案内する予定です。

②2022年日本農業史学会シンポジウム

食の貧困をめぐる近現代史 —「食べられない」の変容と地域性—

オルガナイザー：大瀧真俊（名城大学）

【趣旨説明】

今回のシンポジウムでは、「食の貧困」をテーマにとりあげる。

現在、世界の食料問題は新たな局面に移行している。かつて問題の中心であった飢餓は絶対数・割合ともに大きく減少し、すでに飢餓人口よりも肥満人口の方が多くなっているのである。ただしその肥満人口は、安価な脂肪分・砂糖に摂取カロリーを依存する貧困層が多くを占めており、「食の貧困」は必ずしも解消されたとはいえない。

また社会学の領域では、戦後日本の貧困を、その「かたち」の変遷に注目して論じる試みが現れている（岩田正美『貧困の戦後史』）。貧困の増減だけでは、1990年代以降の「格差と貧困の再燃」をとらえ切れないという問題意識によるものである。

以上のような食料問題の現状と貧困問題の研究動向をふまえると、食料・農業をあつかう歴史研究においても、飢餓以外も視野に入れた「食の貧困」を論じることが求められよう。そこで今回のシンポジウムでは、日本近現代における「食の貧困」を、「食べられない」ことの中身の変容や地域性に注目しながら議論したい。すなわち、飢餓につながる「食べられない」局面

だけでなく、摂取カロリーは満たされながらも、特定の食料を「食べられない」ことで貧困を感じる、あるいは貧困とみなされる局面に注目する。その特定の食料とは、近現代日本ではコメであることが多かったであろう。またそうした貧困のあり方は、国内（戦前では帝国内）でも地域による違いが大きかったと考えられる。

従来の農業史研究では、飢餓につながる「食べられない」局面が主に論じられてきた。近世期の飢饉や、大正期の米騒動、昭和初期の東北・北海道凶作、敗戦前後の配給生活などである。一方、戦前の外米忌避など、食の質に関する貧困については断片的に触れられることはあっても、貧困の一形態として十分に検討されてこなかった。今回のシンポジウムでは、食料事情が大きく変化（戦時の悪化と戦後の改善）した時期を主な対象として、従来見過ごされがちであった「食の貧困」の「かたち」を整理・把握することを目指したい。

座長：大瀧真俊

報告者：中山大将（釧路公立大学）：日本領期の樺太(仮題)

小濱武（沖縄国際大学）：アメリカ統治下の沖縄(仮題)

原山浩介（日本大学）：戦後復興・高度成長期の米生産・消費(仮題)

コメント：湯澤規子（法政大学）

（もう1名は調整中）

* オンライン参加方法および実出席者向けの会場案内は、2月上旬に報告会案内をお送りするさいに詳細をお知らせします。

日本農業史学会事務局

office@agrarian-history.sakura.ne.jp

郵便振替口座 00180-9-20117

(連絡先) 〒606-8502 :

京都大学農学研究科生物資源経済学専攻

比較農史学分野気付

Tel : 075-753-6184(足立)、Fax 075-753-6191